へ13
1310
4

清

春色[illegible]紀回編序

[illegible]の国にあらんで各其戸出し

黄鶯の[illegible]にまた清より[illegible]

丹津[illegible]ではの春よりて[illegible]よく

[illegible]の笑顔に[illegible]剛し

花の[illegible]に鶯目記最濃[illegible]人情を

門へ 13
1310
4

畫しも筆すさびが鳴く東都の名を得て初
在の中なる一物奇書と美称されて初
編より出し発端の続て三編二編と年まして
追て見る人も多くなるにまかせて続刊
真に一時の流行ある筆を採りて二十年再び
巻を継て稿を手に続編を書肆の需

應じて藪鶯の調べに文ぬ附会ゑ
実に目ての捨ひ書冊に我拙き五用
捨を加へり手織のまゝ仕ての糸の紐
長くへ嗚呼是等はあがの底とおびと
恨みかくれぬ如し

為永春水記

春色鶯日記巻之十

東京都立中央図書館

第十九回

東京

爲永春水著

春雨に志ぷぷり濡るゝ鶯の羽風に白ふ梅が香の花に
戯ひまとしらしやト中音に唄ひながら年ごろ廿
四又とも見ゆる艶治気のなき好男子料理茶屋の
貸桃灯を片手に挑げ夜道をぶらくゝ来ることき
此納戸縮緬の頭巾を冠り衣装も随分相変にて

當世な粧容の中年女男の顔を浅ろうらさし
覗きつく小声にて　女へ　姦龍さんじやアないか人ト言ハ
まて男ハふりかへり　姦へヲヤお前ハ外屋の女アイ
お安ごヨお茶此頃じやアさらなり私の方へハ新もお見
せでなれが甚ちたり不行跡が止まないのか人　姦へイヤモウ
嫂公に會のも実ハ面目ね人訳ごがおらな義理だりで
安へアレサ言訳も私が兼知サ吏ごから何も今となりて
お若さんの方を離別てお仕舞と言ふのじやアなつがま

お前か何時までも放むくく拝んでだかり居てお見な
只那嬢に年季を増させるだかりで始終が沈まる
まれじやアないか吏より此所で一辛防して一日も迷く
脉使になる了當をおつける内の金さんも口でちて
お茶のみを愛居も端せね人といつて復をお立ごけま
ども血をつけて兄弟ごものを十二嬢にと思つてお在る
ものかな悪いるのハ言ハなひから実嬢に辛防おしヨ　姦へ嫂
公実に膳しいぜ是までも兄貴の茶を陰になり日向に

なり執成て異なまるるも兼知して居るからお茶の
異見に就てどうぞ真人間になりて一高賣なりて
見ようと思はねへじやアないけまどもどうも捉びつけた
髏ごから肩へ拐棒も無せらまじ俤包からはなる丈
気をつけて兄貴の所へ出入の出来るやうにあやせうから
その時はまた嫂公の働きで　安へそりやア私が呑込で
居るがな去イさん何卒その口をおうまいまでないヨホヽヽ
去へ今度とて大丈夫サ。トキニ兄貴は何も変るるもねへ

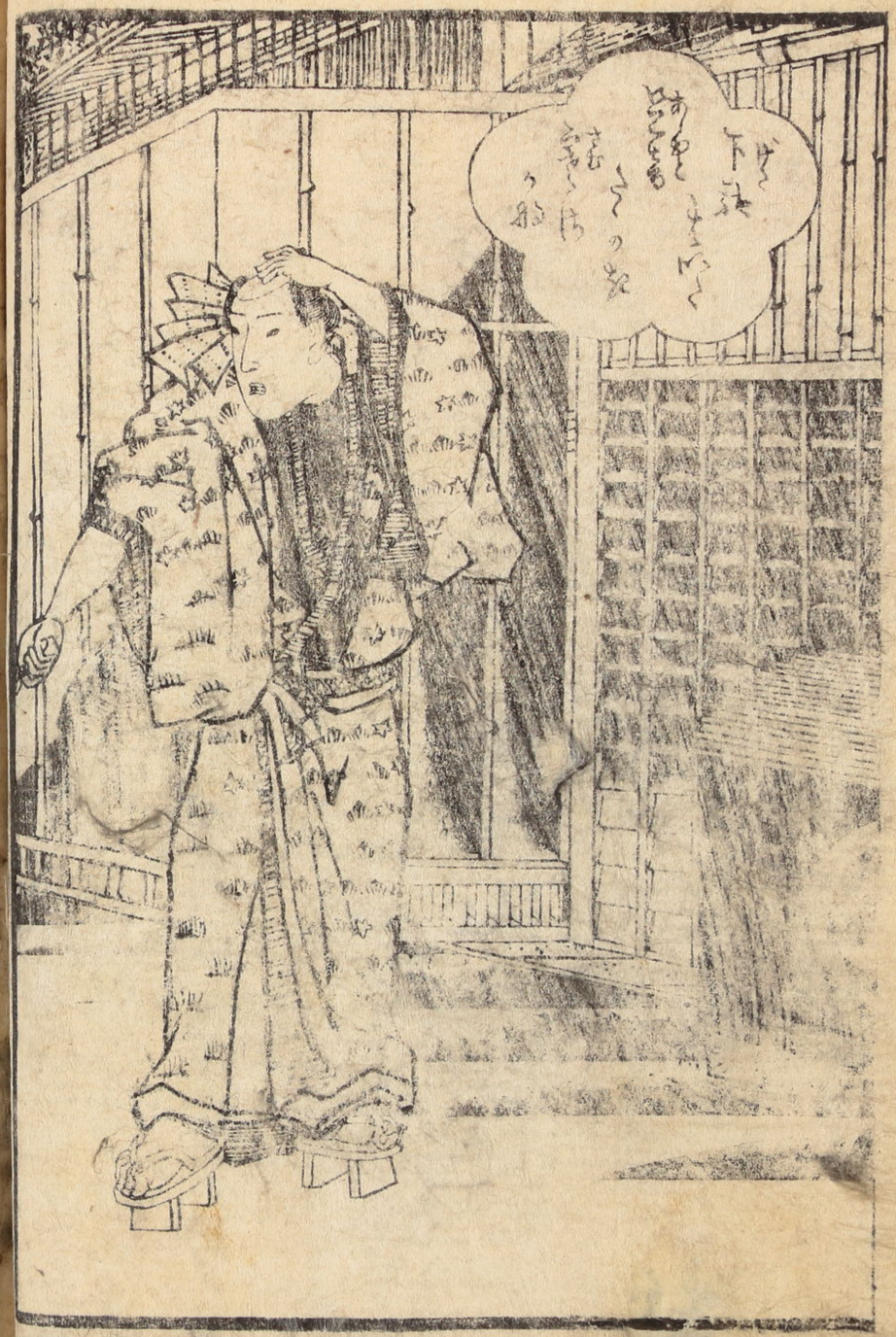
かな　安へア吾丈じやア那いふ乱賛ごろか風邪をひとり引はる
ないから丈はよいがなとんだ世話をあかけて家内は大騒ぎ
去へハテ子そりやアマア何程いふ訳でな　安へマアお聞ヨ窓に可
憐そうな此しサ私も委しい身元は知らないがな苦助
さんといふ窓に善人サ何でも初めはお侍で居たところが
頓りのお金箱へ盗賊が這入ツテからどふとう言ふことけで
浪人をお為のごといふるごがな丈からどんく僥倖が悪く
なりて借金方からは責らまる詮方なしにお蝶さんといふ

お因幾さんに初ぶ子を里に遣りて衣が窪へ百姓で
身を賣ぐこその金を苦助さんが帰る途中で盗賊にあらし
是て仕舞ッこもんぐらら女房に言訳がなんと言つて
身を投ぜうとする所を門の金さんが見つけて子夫から
いろ〳〵骨を折りてとふ〳〵百姓の金をとしら人て備金
方を残らず渡しこうも苦助さんをも家の近所へ
引越させて左振り右振り暮しのつく様にあてお進さ
へ見ぎ知らずの他人でさん事通りごものを況て

お前は親身の弟しやアないへ些ッと吾夫の気に入る様に
もてお見る夫とモウどんなにも世話をして進るに遠ひ
なれヨ去へヤそりやアとんごすごづけ子其所で重百姓の
金を盗んご奴は何所の奴ぐら手掛りもね人のなエ
安へ何様も一向手掛りがないトサ。マア重百姓は詮方が
ないけ是どもは苦助さんが此屋敷に居ることきおかね
蔵で盗まれた二百姓の金にハ一姓々々にお屋しきの
極下が居ッているそうぐらら夫を手がけにして其

二百両の盗人を尋ね出そと直に屋敷へ帰て来が
懐ふと見るけれども他に盗まれて枕探が
それから何振も仕ますごに知れるかいトサ。ト言ハれて
森庵ハ少し考へ 森「そして手極市ハ何といふ字
どう知りて居なさるか 安「さうしか丸の中に井菱の
極市ごとお言のごョ 森「エそれじやア丸ニ井菱ごトエ
安「ア 森「ハテナ 安「何ぞ身がうまでもあるの人 森「去とし
心当りがあるかサ 安「ありやア何より好なものざねへ

森「夫にしても先の屋敷の名を知らねへじやア吟味も
ならねへ から翌日にも手紙で鳥渡知らせておくん
なせへ 安「ア 継実礼して知らせておげるヨ然らして
お前今じやア何所にお在のごエ 森「私の住居かネ
安「然うサ 森「アイ何サ 安「何とへエ 森「両国ねへが
井川ござり方に食客サ 安「ナシヽ 夫じやア手紙を何
所へ届けていゝのだか知れるねへ 森「ナニ横町の
料屋の七が所まで出してあると直に届きかたで処で



私の方でも見ぞとは詭拠を見止さと言ふでハなし
マア当分ハ貴兄にも苦助さんとやらにも沙汰なしが
いくぜ安へアヽ史ハ兼知ぶがは何卒一骨折つて些とも
迷く良信を図りせてお呉ヨ。そんならお春さん夏ぐ
私きやアお別まで ヨ 春へ侍ね人吾儀が門口まで見て
ゐげるから 安へナニ家ぢ近いから獨りでもよいヨ 春へ
史じやア此挑灯を 安へナニお月夜ぶらうへ入つて邪ナ
ぶいは そまでよりお前 今夜ハ何所へお在ぶ知らないが

ゐんまり夜更しを為て酒を呑でハ髭の妻ぶ。ホイ
また野暮を言ひたまエ。ドレ余りませうホシト言ひ
捨てお安ハ横町へまつまゆくを春花ハ姑且見送りて
春へアヽ此身が貴兄ハ僥倖ものぶゐんな実のゐる
女房ハ鉄の草鞋で尋ねしぶてゐるものじやアねへ。
や史ハ然うと今嫂公の言ひたゆハ苦助さんと夫が
盗まれて二百夜の小判まハ丸ハ井菱の極印が一夜
こゝに押てゐるとの咄しぶがト言ひながら腹掛のかくし

より紙に包ミし小判を一枚ゑり出し挑灯の火に
透し見て狭く柏子に挑灯を思ひぞ下へ落をおしも
四時の瀧ゴヲ引く

作者曰この一段はお蝶が寝ぐ身を着づゆ
次の年のまゝにて第三編の下の巻に著しる
清花が底気の段よりは三年かども以前の物
語と案しゆふべし

前話休題実にまさ奥新地なる伊勢本の地の娼妓
お梅は条吉と深く訓染てより他の男に肌身をゆるし
自性になるが口惜しく。とは言へつとめの悲しさは愚な
客かど此方から惚れさせて見せてくらねば何かに付て
奴合もするく寧そ此身が娼妓を止め歌妓になりて
慾を捨産業だうりを勤めたらとんな苦労はいる
まいと思ひついても若なり金の入目に手支しが
うの条吉とも相談して漸く新地を住替く話て
和哥町の倶女となり名を梅八とあらためて初めて

客に出し日より新地で身取りと評判されたる
ごけに人電よく取分藝と容貌とは言分の多き
梅八ゆゑ自と客のつきもよければ新妓と誰も
なるどうぞ須臾がうちに指折の名歌妓となりし
かば又改めて種々に言ひ寄る客も多けれど只よき
程に言ひ寄して産愛だろりを勤めるのこうの条吉が
其他には一個の客にも身を任せねば内諸に召見の
なるを知らぬが佛梅八は男嫌ひと言ひ立ちまた

奴と渾名をとりしより炎旬産愛も誰とめよく
客の受き人よりしかば日増に評判されしとぞ
然るども沢越の今年湯といふ客だろりは彰地に居
たる時ぶんより格別世話になるのこう今度位置に
出るについても条吉ひとりのちからにてなかく及ぶ事
ならねば今年湯をなりやすして余かどの金をも出させし
事ゆゑ今さら突出を訳ゆもゆるねと何卒先うら
事を引て呉れんよのと種々に禁旬を言つて當つけ

シタガ気を短く為ちやアいけないゼ　うめ「アそりやア
私も兼初ごけれども所んまり気隣を言ハれると
ぢまつたくするヨ　ヨ「史もこんなくの家
の為ぢ事な　うめ「空アねへヨ然うおりつて辛防する
ノサ事ハ　ヨ「ホンニ今さんに會こう此ろ卒度咄して
事を図て見て事異ヨ　うめ「アヽ今日ハ間を見て
図て逆ヨ　ヨ「そんなら　こんとお情合ヨ　うめ「アレサ
延気でもないヨ不乗気な　ヨ「事ハドレ吾体も粘

装ふくらうト言ひながら福羅屋といふ媚妓屋の
廓へ上るにはまた演本の座しきあてハ彼
沢越の今多陽が些寓酊といふ顔つきはて古来ぞ
大勢ゆゑあて朝呑をたゞめて居る　米吉丈「モシ旦那
昨夜のお世界ハ何方子些うけたゐはりたふござる
まに　今「十二這方の帰りに千葉の花家が住へ
寄りたら引留られてとふ〳〵今朝まで呑ミ明しヨ
米「イヤその言訳くらいく　何でも何所にる秘

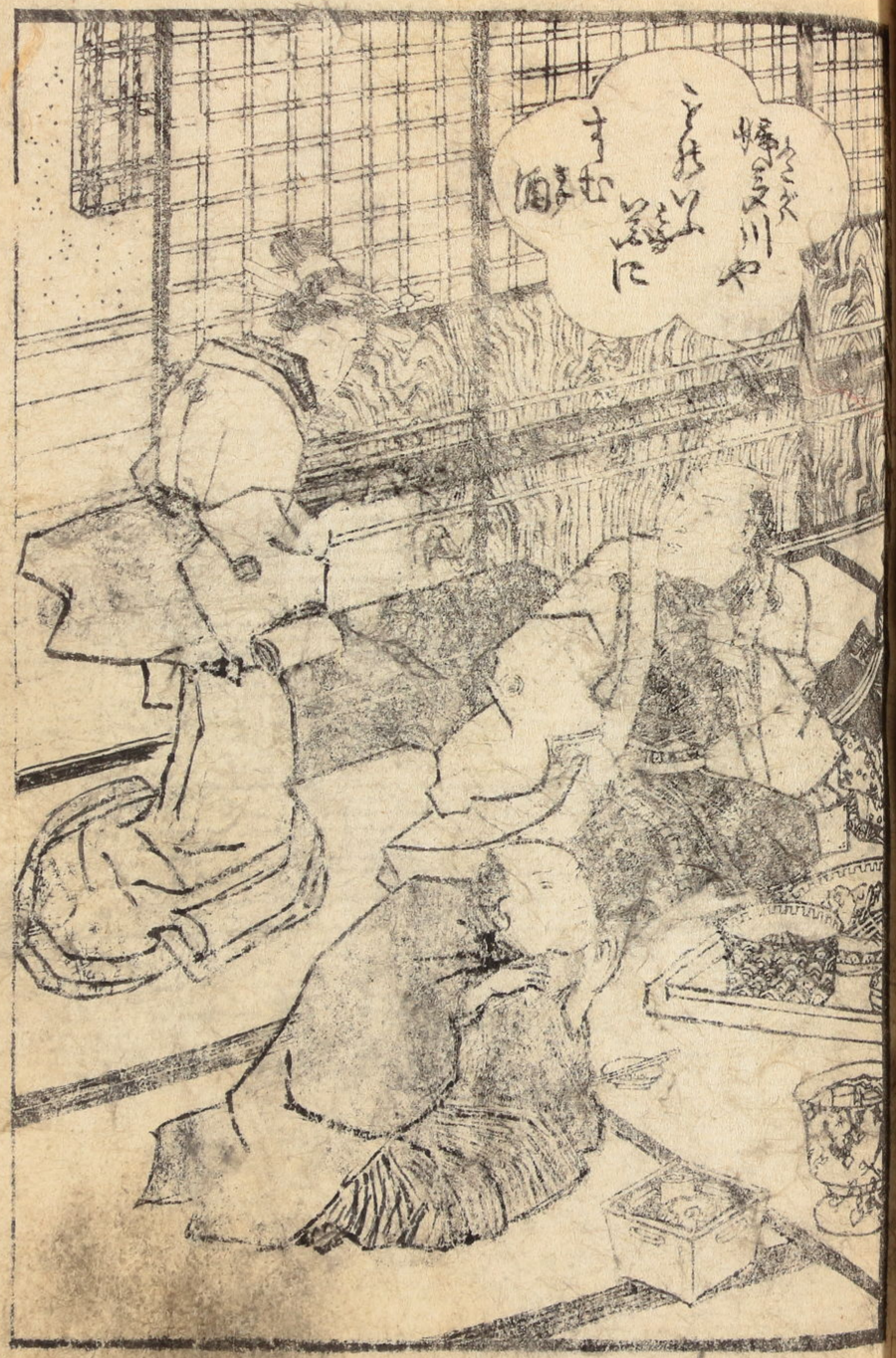
密のお栄がなりと見へ女をも手紙へお供を仰せ付ふ是ないとは些眼を　栄孝へヲツト米の字葛の義ゑ

なりねへぜ　米へそよく先ツんぶりを為さがるヨ栄様の口出しをする幕じやアねへい　和十へ幕じやとは脇見さぬの松に居る蛇ごらう　栄へごらう稲荷の大明神　和へ明じんに物瀧　米へイハハヤ何方もく達者にこじつけるそ雪都り謙訳がないとさらねり通じねへ洒落ご　和へトキニ旦那お猪口の酒不用い

ごぶるませんか々へヤ是ハ山僧促サアく大盃く　和へイヤとりやアなんまりひどふ在山屋まれ　娘ぶんへアレサ和十さん名のりかけてお呑でないと卑怯ごとゆへまるヨ　米へ遠へねへお森代さん娘分の名の言ふとふり呑ねへと卑怯く　和へヘン今の歌を取うと思ふて　エシ旦那私どもの連中ハとる此通り同士討が流行のぞ関り女を中にも　和十るぞハ男が好丈け一倍そねまれまれ。ソウお森代さんお前にも然う見へる

ごらう何でも女中方のお目が曇らぬ鏡サ子へ
てんげんごヨ自惚も程がありまれトサ来ゝゝ々へトキニ
梅八はまごかノ きゝへ今追迎ひを申りましたからモウ
車ぐござゐませうト言ふところへ送りの男が廊下の
障子を明て梅八の箱を持込むと尋もなく梅八が
しげかに一ト尋人入来り うめへヲヤ々さんと言ひこだかり
完爾笑ひて程よきところへ居りちよいとお辞儀を
する きゝへ初まこゝるごがな梅さん今日は別して美

しうござゐまれヨ 形へ且那に見せやうとおもつて
おもいまし彩粧て来たる 米へ誰に見しよとて
紅粉淡粧つきよぞこんな主へのしんじめ為
梅さん思ひやうまるゼト言ひながら梅八の脊中を
ちよいと敲く うめへヲヤなんまりいゝめてお呉ぐ
ないヨ親のなれ子ごからホゝゝゝ 和へトキニ梅さん持
合せましたからトかの大恋を梅八にさて一見は
早速。ヲヤ大きう大きな 和へお前はこしか大きいのが



うめへ勿論左指サ　和へ手所で因那のが　うめへヲヤ
おがんてお在ヨト　重ねて和十を打真似をする
米へヲツト千話喧嘩ハならねんく　牡へと言ふと
何様か梅八ぎんと和十子と　和へ情人のやうにでも
見えるかな　きまへヲヤひやうまくよくいはれてねんまゝ
ト是よりいよく大酒盛にありいろくなれ
どもるす長けれバ夜に略せうくて牡孝和十
米左衛門今吉湯の心を案し程よく座

安を外して行けば跡に残りし梅八ハかの今
吉湯と呉ふたり他に人なきさし向の座愛も
深辞と物淋しく須臾言話もなりしが
やへコウお梅些と浮て呉れねんか何ぞう酒が那に落て
仕舞ハア　うめへ私きやア碗の性ざうか何時でも沈て
ばかり居て迚もお前たんのお気に入る事に浮さ
るハ出来ませんナ　やへ是ハ此挨拶ごの丈じやす
浮ぎバ浮ねんでいくから一ッ公よく呑ねんな　うめへ私

きやアお酒なら堪忍してお呉んなさいヨ　々へ何たく
うめへ呑うくなりませんからサトねんとして　々へヲイ手前何が
気に障ひこのごろ浅んくなるが夫じやアいん
まり義理が涙めんぜうめへヲヤお前たんは義理といふ
事を知りてお在なさるゝ久　々へ知らねんでサ　うめへ夫に
また昨夜はどふなるこのごろ私への酒ゆてかは知ら
ないが新地の小雛さんの所へお出さそうざ子気分
そんなるをおなさいヨ迚も私のやうなものは末

始終お前たんに見すてらまいと言ふのは枠が強い
のごから　々へ十二おまがそんな浮気らしいるをさるわか
うめへヲンおとがけでないヨ私のやうな者でも此去地で
些とア異質にして異る人もありまたからお前たんが
昨夜新地で形うごろと言ふるは亜に知まれヨ
々へそりやアなんまり情ねんといふものご実にそんな
事をして覚へはねんものを　うめへお前たんがないと
性をおとりなら　ないにもなして進やうがなお前たんは

お若さんの所へ来る十三湯さんといふ人を知りて
お在なるか々々エ。くや知らねへ うゑへソレお見るよい
然う私にお隠しごものを此方でだうり実を尽し
こちて无益ごヨ々々何故々々 うゑへ何故もないのごヨ
私きやアお若さんとハ寛に脱妹のまゝに和合よく
為て居ましたから其お若さんが血道をなけて臨て
居る十三湯さんがお前さんと心易いと言ふるも
よく知りて居るものをなぜなり隠しておいしやア

私がいふら気を揉でもお前さんの方に隔がなりて
見ると実に口惜くなりましたハト 涙々々何も
史に泣るゝハないなる成ほど今まで隠し立をみて
のハ悪かつた実ハ十三湯さんといふ言ひかけしが
跡を言ハど鼻紙袋より金を十枚だうり取出し
紙に包んで梅八の懐へ入れるがら 々々十さんと此身の
中ハ淡い根子のなるゝ ごが今さら史を出して
所がたゞしまらねへマア史よりもト言ひながら後ろ

から抱付を梅八は振りたなしてしやんとなり
今さん悪戯てお呉でないヨ牡丹に居た時は兎も
角も此去地へ来らやア奴唄女と人に言はれて艶色な
噂をうけないのも私が深底惚れて居る男の実
意が知れないから夫にマアお前さんは私の変るは
秘密しに為て口先で私を欺し金で自由に仕様
とは寛に膳しい心意気ごヨお前さんが然りいふ
気ごらうとは夏にも知らず今日までも苦労をなさ

うと思ふと口惜しくりてなりやア為ないとても私の
やうな馬鹿正直なものはお前さんのお気にやア
入るまいから金で女を自由に為る気なら随分
慾張って娼女流を呼んでお捨びなさいト言ひながら
かの十友の金を今三湯の前へ実を盛りざめと立て
行うとする後今三湯は急に引止め今コヽ梅八
此身が金を出しこのが廣に陳列ての復立が知ら
ねへけれども是までも長の年月通つて見りやア

此身の氣質もそんげん知りて居るごとうマア下に居て居るがいくやなハテ聞こくバ十さんのまも一張さぞに言ひてお愛かせかト言ひて手まく其処へ居るそのときは今湯は思ひぞ湯息をホット泄き須臾掬八の顔をのこうちながめてぞ居たりける

春色鶯日記巻之十了

春色鶯日記巻之十一

東京　爲永春水著

第廿一回

墨田河の西岸に芦葉といふる一里ありて這所に金名を築木屋といふ一軒の酒楼なり（今格場に柳屋といふ料理築屋）

四季折くの眺望を兼て客の絶間もなき中にこけて春夏来まバ楼まぎての涼船は拵拵人あらねいなく最賑いしくぞ栄人ける折しも今日は

気分て空に風なき水無月の暑さを這処に凌がんと
川に添ひたる小室にて程よく強ぐ一群ハ客と唄
女のさしむかひ（客ハ十多房 唄女ハ梅八）十一コレ梅八さん有波一重進う
かいなマア三絃ハ其に並んかお前ハイコ素面やなア
ヲヤなんなるをお言ひなさるヨ私きやア先刻からお
前ハたんに強看つけられるのでどんなに酔ひ
ましたらう見お見なさい顔もまもとんなに赤アく
なりましたものを本ニ十二赤いるハおまへんト実

接立じやがなア十一ヲヤマアお前たんハ窓に口前がいくヨ
迚断がならないね夫ぢからお若さんが気がもめると
言ふ苦ごヨ十一なんのしく気を揉で異るなうなアや
這方にも張合がなるさらい金出ふても面白いが何様
にも那麁といふ和郎が付て居くさらて毒性な
るだらり為くさるさらい狗くたが悪うてなるなちや
ないがなア夫ハ然うとなのお若ハ何所へ往て何して
ぢやか又情男とちくくり合ふてなど居ハせんか知らん

ト言ひながら立つて座新号をきよろ〳〵見まわせ
うわ「アレサ十さんお茶さんでも似合はないぢんすけも大概に
お為なさいヨ今お着さんは湯をつかいにお出のじやア
ありませんかお茶さんに見せやうと思つておもいは
磨て居なさるに遠ひありませんヨ十「私も彼女が
風呂入に往さるは兼知しておやが髀中を木械廚て
しがいても知れさものじや長いと言へてもなまり唖
方らしいこのなトまた行ふとまるを引とらて「アレサ

そんなに気をお揉なさらずとマア考てもお見な
さいな倶令お着さんがどんな浮情なものごと
言つて夏の内でどんな事が出来まはものか子マア
そんな事を気にかけなさいで一重お吃んなさいヨ。ヨヨ
十さんト言はれて十分後へ顔を歪し十「お茶が
そないに言へてなりや聖言らしう復と立ちやせん
こいな。ドリヤ気を替へて一重やりましよかうわ「お茶
さんが然う機嫌を歪してお呉んなさると私もモウ

どんなに焼しいか知れませんヨサノくお願を為ま
せうね人アレサ年方の大切のにお為なさいヨト云ひて
銚子を取りて十分に酌で出りながら　うゑ「アノウ十
さん私きやうお前さんに使ひ事がありまれが隠
さびに言ひて聞せてお呉んなさいな　十「モ里やまう
お前と此身が中じやおまへんか何じやなろと言ふて
見なされ隠さの何のと其様なものはありやせん
がなア　うゑ「然う思ひてお呉んなされば私も其気で

公の底をうち明てもふしまれが子ト言ひかけて
おし小夢に　うゑ「アノウ私の所へ五年だけも迹
から訓染で来る　お客に今さんといふ人がありまして子
実によく世話をして呉る客人でありまれから始
終いどふぞ其人と同所にありたいと敏かが思ひて
居まれけれども何ぞの先の人の気がつまちきを
実情に可愛がりて来て呉まるのだか当坐の抜びに
来るのだから何程も知れませんから所詮娼妓で居て

大勢の人に躰を任せてゐ先の人の心が面白くも
ゐるまいと思つて丈から種々気を揉んで和歌
丁へ位留て出てからハ産愛だけを正面につとめて
居まはので此方じやア男臨ひごとも何とも人にも
嘴をさまるやうにもなりましたのも何卒ふきんの実
情の心無気が見たいと思つて苦労をまるのでゐり
まはけれども此間ぬり先じやア隠して居るやうで
宅に居まつたくらてなりませんヨ丈で子私がおもふ

ゐやア何でもふきんの友達流か丈でなくバ心易く
まる人に頼んでゐの人の心を受て貰ひふとおもふうち
此ら演本の産愛でふきんが言ふゐやア何の十主湯
さんとハ種々仔細がゐりて極心易くまるとお
言ひごから丈じやア お前さんに内證で開ちう振
子が知れやうと丈でお受ゆふまものでゐりまは
が子ふきんが何ぞ私の事をお前さんに何とも出し
なまつたる事がゐりやア為ませんクスト笑まて笑し

ぶつくり為さといふ様子にて　十へコレ何と言ひなるる
左様ならばの　今幸湯さんが此身と種々仔細がなりて
心易ふまゐると此様に言ふてうるる那かと口留して
参ふに。イコやくこゝる人やなア　うゑへヲヤ夫じやア　お茶
さんと今さんと心易くお為なるのを私が知らぬちやア
こゝまいのでなりまゐ久　十へなんのしくお茶が知らぬ
うらと言ふてこゝるいなりやせんがなア　うゑへ夫に
何故まゐ口留をお為なるのごエ　十へイヤとまゐれい

迯深い　うゑへエ　十へ左サく深いも浅いもなりやせんが
マア此様なるは聞かいでもなくじや　おまへんか　うゑへ安く
なとお言ひなるなら安まゐまいが子そんならお茶
さんも今さんと一所になりて私にお頼しなるる
のご子勝しい心意気ごヨト法んと　十へコレサそなりに後
立いでもツイ解りてじやがなア。コレ能う安いヨなのに
さんはお茶まゐ。ト、貧丈じやがなア夫かど惚て居る
お前じや　もの頼して何にまゐるものでなき所を

終う思わんせ費が今口止しことと言ふこれ他へ知れ
ては終うない御じやさうは言ふこのじやが
実は私と今さんとは血を分た同姓の兄弟より
睦ましい中でお茶のまも敏から女房にせあやから
ねと言ふてじやさうは何も按じるまはありやせんぞへ
うめへ仕お前さんは然う身軽く お言ひでもなさん
私を実情に女房なんぞに もらう気はないのごヨ其
他拠は何でも私に隠しもなりお在ならるものを

ホンニ愚痴を言ふのじやアありませんがこんな情のない
人の世話にならないで初めからお茶さんの様な実の
あるお客に惚れたならこんなに苦労はなるまいと
思ふと志ぐ志まらさくなりましたヨト言ひながら
さも惚れたといふ同付にて十三歳の頼をおろりと
見ゆり完尓笑ひし笑くしさ千国元なるが口元なら
こぼるゝだうりの電数にて飛びつきたいかど可愛らしき
多の身とりの梅八が何じな言葉に十三歳は若やと

おもしんが胸ドキ〳〵　十八コレ私がゆうなものでも実がお
是がお茶正真に情人にならふとおもふてかいる　ヘ
思ひなれるが言ひ是まほものかヨト　いふ心のうちふとれ　とんだ自惚ことおもふ
なるべし　十八モシ梅八さん嬉しいぞ人　ぞ人　私や
敏かがお茶のるを。アヽ美婦じや佳人じや男と生れた
その甲斐になるいな頃妓さんを只一枚でも自由に七
見たいものじやと朝晩思ふてハ居るものゝ　今　多清
さんの手茶もなり支でなくとも私がゆうなものが

伝様思ふさからと言ふてお座の接で見たとなり迚も
手に入るるじやなろまいと辛防して居ましたに
お茶の方から実様に言ふてなりや私やモウ今死ん
でも大事おまへん。サヽ〳〵善ハ急げしや多渡きまり
をト言ひつゝ手を取りて引寄せら是梅八ハ然と
自由になる振りをあるがら　うめ　アレサマアお付なんハヨ
お茶さんが然ういふ気になりて　お呉なんと是ハどふ
でもなりまほが子私きやア歯坐のおるぐさまなら四免

ごヨ分でもお前さんが来始終見捨てお呉なさらないと言ふこしらなるをお見せなさらないじやア世ちだり氣の揉る種でありまたから私を可愛がつてお呉なさる氣なら来の法まりは形うまると言ふことまで分率きめてお呉なさいヨ　十八そうや言はひでも却是こるじやがなアお前さん淨心なりや私や女房に居るこゝろ　うめ　夫なれば嬉しいか子どふも然う口で言ふゆうにハ行ないものサ　十八イヤ急度空言ハ言や

せんぞ　もし夫ともに疑はんまなりや何様な誓言でも為て見せましよか　うめ　然う手強く　言ひて　お呉なさりやア私もそれで是を非にまげてもお前さんの女房にならふと思つて居ましが子然うまる日みやアお若さんや今さんの方は分相お為なさる　十八そりやモウお若がるは最前もいふ通り春花と　ゆふ嬉男めが附くさつて居るさらい私が方から実出そうと言や牛房なとな尾をふ川て離別て往ね

初まてゐるゐい又々急湯さんじやとて真実の所ハ
余り心ゑく人じやゐりやせんぞエ　うめへ何ぞ悪い
事ぞもゐることゞゐりまものゝ人　十八ゐるのないのと
イヤモウ思らひ人じやがなア。コレ言うハ言ハまね鳥
渡耳を出しなさまト言ひて接八が耳に口を寄せ
何ら姑且低浴て　十八ナ。ソレおそろしひ人じやゐろまいる
うめへヲヤ吏じやア沢越の所人といふのハ空で　十八真実な
事ハ今言ふこお屋敷のお金龍から二百匁といふ大

金を盗ミ出してその屋敷を欠落した那でも以前ハ武
士じやがなア　うめへヲヤ吏じやア苦助さんとゆらの頼りの極
印付の二百匁を　十八ヤ　うめへアレマア大まな事ぞこ子エびつくり
ゐまさア子ホ〜〜〜

第廿二回

藥木屋の風呂場より静かに出る一筒の折椰妓
緋縞紬の二布の上に鳴海絞りの袋帯衣を着
する侭耳のゐたりを拭ひて居るを這方の小室より

男の声にて　男へヲイ〳〵お若　此所ぞ〳〵ト小麦にて
呼びかけるを彼女は目迷く見て　ヲヤ森イさん能
来て居ておくまでご子工私まやア何様ぞしうかと思
ひて寛に苦労ぞろ　森へ唖方めんとんなるから
抜目の知る此身じやア何人ゆア　トキニ那方の都合は
ヲヤへ何の接八ぎんが呑込んで居るからそりやアいくが
子ト言ふところへ此家の女がお若の長物を抱へて
来り　女へ此所へ盡くまゐりませうか　ヲヤへ何卒

そこへ盡てお呉もそして子ト言ひながら十三歳の居る
方の座敷へ指をさして　ヲヤへ那方へは内儀〻〻ぞよ
女ハイ　そまへ少しもお按じなさはまれな私が知れる
やうにいつしませんヨ　あゝ庄様なら此寛りとト
言ひながら立ふとして又ちよれと居る　女へホンニ
お桃子はよろしふどざゐまれか工　森へまぞ沢山なり
やす　女へそんなら那方に居りまれから此用がなる
ならお呼びなまれて个さはましヨト言ひ捨て立て

性く〻氣の煙ひいて女中ご子へ　姦へどふしても
這所等に居る丈け如才はねんのス。トキニ頼んで無さ
るはどふぞ些とア是ぞと思ふ心なりでもなるか
〻てお前さんが先頃參うお言ひごろ十名湯さんに
業所でお茶さんに進ぜり私が參りしこお金成
ざんく改めて見た所がそんな丸に井筈の極下が押て
なるから若や苦助さんとやらが頼りの二百両の
金でいなりと種々手を替て試問て見ても何様も

是かと取とめた淺拠も見出さぬに居たところが玄
年の秋和哥裏の浪和屋へ住代に出た梅八さんと
不思議な縁で心易くなりごんく、内淺の出しを
するに就て此事をも卒度出したら那嬢が言ふ
みやア私の所へ別染で来る人名湯さんといふ客人も
丁度その通りの極下の押た金を大そう持てゐる
といふから丈じやア十さんも今さんもひとろ穴の抓て
居るのかも知れないと思ひたから梅さんに頼んで隠く

ゆ
湯にぢりの
肌や
うもし
せ
風
ふ
き
蓋る

孫子を関て貰ふて所がどふでも夫に遠ひないやう
ぐらゝ今日はまた十さんの方を梅八さんに熱く欺
ゑて関て貰ふつもりぐらゝ是で大かたは知れやうと思ひ
まはは森「ムウ然ういふ訳で見ると十が九ッは那奴等
二個が所為のやうに思はれるから今日の孫子を突き
うゑで外屋河岸の嫂公の方へ早速知らせて出して
苦助さんの身の明白の立やうに仕ふやア此身も頼
まれて甲斐がねんといふものゞ実のあるが身体も知らて

居るとあり嫂公に此事を頼まれてから寄り彼見
三年越にもなりて見ると此方じやア出所なく鑿
穿をして居ても嫂公の方では投出りにでもなして
居るやうに思ひて居ゆへものでもなし夫に此頃偽を
突けば花街へ住りて居る清花さん苦助女房も大病ごと
言ふるゞから些とも速く能イ性しを突せたら乳が
引立りて自然と病気も快くならふかと言ふてあり
思ひて居たが身前と梅八さんのもとゞきでその盗

人が聖して見ると苦助さんは山屋愛へ帰来が悩ひ此
身アまた兄貴の住居へ出入つても出来るといふものぞ
吏と言ふがそんな此所に居る此山の神の御利益
ごと思へば案来に為たら罪がなくなりそうぞト言ひ
ながらお若の膝をちよいと放く　コヤ〳〵お前さん
なんぞね人私きやア真面な話説を為てお在かと
おもへば世間だり例の気体ぬ人　表へ十二こまだら
うりは実に手前の働きひとりで此身の顔まぐ

言ひとはふものぞからどんなに神を言ひても言ひ
世アあねへ思ひし此身が自然らしく山の神と
言ひたのが癪に障り嫌忍して呉んね人　コヤ
アレモウお前さんは彼と言へば彼うと寛に意地の
ひとりはヨそんなにも私がいじめたいのかチ　表へムウ喜
地めてへから彼う世間ではいじめて出るのぞト言ひつ
お若をグツト引寄る　コヤ〳〵アレ誰ぞ来ると悪ひから
アレサモウ申けなれね人　表へ何がいけね人　コヤ〳〵お前さん

ガサ　去て　何家々々　なりませんヨ帰らしい　去て　此身ア
まこと此笑窪が可愛らしい　なりこアレサ人が見ると悪い
ねまト言ひながら序ものに後ろの隙子をピッシャリ
建切る

付麼々々沢城の名藤とのふい実ハ鎌倉方の
侍士なるが素よりよろしぬ俳者にて同家中なる
犬渕苦助が頼りの極下金二百匁を出入の
町人十藤と言合せ金庵より竊かに出し

罪を苦助に塗付て手身いくぢんの二百匁を十
藤と山にけにして徹て心を掛ける新地の娼
妓お梅が方へ通ひおのひのまゝに乗しむうち彼
苦助が妻のお蝶が貧苦に迫りて点が寝へ
百匁にて身を変るよしをひそかに同出せし
かが再び悪会せじまこと十藤と荷擔て苦助が
金持けて帰る途中にて矢座に打休して彼金を
奪ひ取りいよく奥をそへて乗しこしに悪の

報ひハ忽然にかの十三湯が悪ゆも梅八が手
くぐに無せる是々三湯が悪るを口ぐしりしより
其身の罪のひらゐ是ハ此後いかにかりゆくらん并ハ
次の巻に委しく解べし

春色鶯日記巻之十一了

春色鶯日記巻之十二

東京　爲永春水著

第廿三回

六郷の渡し場へ四手駕舁おろしながら
モシお円幾さん此約束の所まで無りましたト言ひ
法く駕の垂をひけば是ハ駕の中より年頃廿二三の
女七才だかりにある女の児と相駕に垂門て居るが
後先を見まへしながら女へヨヤモウ此所が川端とせう

久そして且那ハエ　かどきへ今モ所へお出なさり世モト
言ふ所へ是も年頃廿五六とも見ゆる艶男紬浴の上へ
几納戸結城の羊合羽を着たるが名ハ　苦助へイヤ駕屋
さん大そう早かつたの此身ア退付ふとおもつたので
大行になつたア。トキニお蝶お前駕にゆらしたので公
持でも悪かアね人か　てふへイエ何ともござるませんヨ
苦へそりやアよかつた吏じやア這所から些とぶらく
歩くがいゝお栄ハさぞ駕の中に倦たらうト此うち二

人ハ駕より出ると苦助ハ紙入から二朱金をひとつ取り
出し　苦へサア駕屋さん此うちで一重呑で呉るかどへイ
是でハ余かどお法りが。へイく是ハ有難ふござるまた
左様ならお静かに又お帰りにお願ひのふしまたへ
ト言ひながら亮駕をかつゐで蔭簀張の茶見世へ
ちいる苦へサア此舩に乗りおくしると余かど待ね人
だやアならないぜ　てうへハイ吏じやアお栄を　苦へコシく此
子ハ此身が抱て乗せるからお栄へよく乗がけに気を付

なヨまご廊後で豆がぶらくまるからト亀より三人ハ
渡船に乗り程なく向ひの岸に着と　ヤマヤ怖
うつこ私きやア久しぶりで船に乗つこから目がまゐる
ゆうでどんなに気味が悪うでござるませう　苦へそりやア
その筈サ亀まで久しく廓の中にだかりなこう家に
ゐていふ大廊を煩つこのごものを重くらひなるハなり
そうなものヨ史ハそうと仁田屋か安年屋へ参りて
お阪でも喰ねんかそうへ十二私きやアまご些も喰度ハ

なりませんヨ史ともお栄お茶ハどふぞん　あいへ私ハまご
お阪ハ否　苦へヨシくそんなら大師さまへお参りかふして
帰りがけのみと為やうト言ひて三人ハ河先の旅を
右に見て大師道へと這入りながら　苦へトキニお蝶や今
改めて言ふでもねんがお茶の杏度の大廊ハ只へ出
あて言ふハ今日がたゞめてぶろ　余ほどむづかしかつこぜ
恵が窪の親方せん迚もいけねんと男へバこそ沈文と
添てお茶の躰を此身に引きこして呉かくらみぶ

ものを其時の此身の氣はどんなごろこと思ふ腸が
ちぎれるやうな心持を顔にも出さずに堪て居たが
大師さゐの四利益で祈う快くなつたのは実に黄
豆に花と言ふものごぜ　そう「ホンニ私きやアとても此
世ではお前さんやお栄と祈う同行に大師さゐなん
ぞんお祭りをいたしてるは出来ハ為ないと覚悟をして
居ましたにお前さんとお栄が大師さゐへ火の物ぶち
まで為て私の病気の愈るやうにと信心をしてお呉な

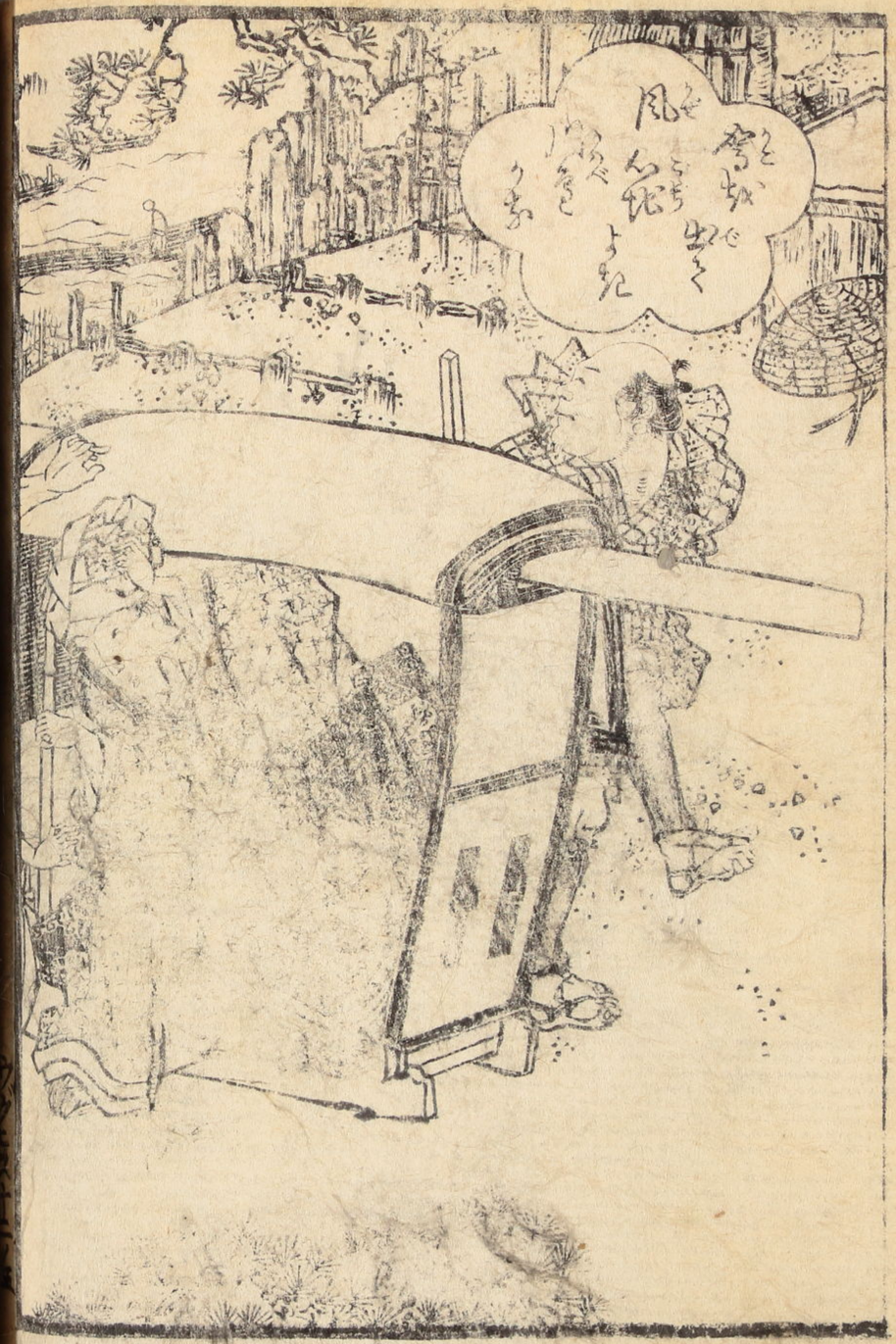
もうこお蔭でこれとかうこのでござるまはヨ丈につけ
てもお栄やお前はマア やうく七才かそこらで可憐
そうによく喰度ものをも辛防して火の物ぶちを
あてお呉ごノウト言ひかけて稍涙ぐむ顔を見上て
子どろに　「おぢさん又お泣ごと病気がつるくなる
ヨ。モウ泣きに迷く全快に病気をよくして何時とも
住居に居て私を可愛がつてお呉ヨそして子モウおあの
るをおぢさんと言ひごとにお母公さんと言つてもよい

ものを其時の此身の氣はどんなごろこと思ふ腸が
ちぎれるやうな心持を顔にも出さずに堪て居たが
大師さゝの四利益で祈う快くなつたのは実に黄
豆に花と言ふものごぜてう「ホンニ私きやアとても此
世ぞはお前さんやお栄と祈う同所に大師さゝなん
ぞんお祭りをいたしてるは出来ハ為ないと覚初をして
居ましたにお前さんとお栄が大師さゝへ火の物ぶち
まで為て私の病氣の愈るやうにと信心をしてお居る

もうこお蔭でこれとうつたのでござるまはヨ丈につけ
てもお栄やお前はマア やうく七才かそこらで可憐
そうによく喰度ものをも辛防して火の物ぶちを
ふてお呉ごノウト言ひかけて稍涙ぐむ顔を見上て
子どろに「おばさん又お泣ごと病氣がつるくなる
ヨ。モウ泣きに迷く全快に病氣をよくして何時とも
住居に居て私を可愛がつてお呉ヨそして子モウおあの
るをおばさんと言つぜにお母公さんと言つてもよい

のくへト言ハまてお蝶ハこまりかね　そう「アレモウそんな
可愛いるを言ひてお呉ごと泣まいとおもつても
洞がこがまてなぶるいヨ宮う見ろハ誰の前で母公
さんと言ひてもよいヨ。ホン三見まだハ可憐そうに血を
分こ母子でなりながら母とも子とも言ハまいのを
姪子公ゆも本意なく思ひて居こらうノウト言ひて
お栄の身を取ひて怪へかねてやだかくとこがに親
身の淵なるごと苦助も道理とおもへども往来の人

目をたゞかりて　苦「コレサお蝶その歎きハ無理とハ思ハ
ねへか途中で泣泉を為ちやア才一外彼もよく見へ
モウ斯う目出さく親子が一所になまばこ言ひ言
出して泣より笑ゆより走るのハホンの愚痴と言ひのぐ
此上ハ一日もたやくお屋敷へ帰来をしるよふと大
師さまや神さまへお願ひ申ふ事が一番ぐお米小さて
関せよう知らねへか此方外屋御屋の親方が我ハ金太
考渡言ひて呉まこさるも御ゆからいまくいの二百



両の盗人が知まると此身の月の明白ハ直下を
いふものごからモウ〳〵苦労にまるゐハ私人ぜ支く
マア此人の出るゐを見る流行とハ言ひなるゝこれ
そうな余情じやアなのゝト言ハまてお蝶ハ完ぶ笑ひ
てう「ヲヤ涙までとぶしましたゝね人私きやア何の病
気から可麻らしいかど愚痴になりましたヨ苦そりや
其苦ごが些とうきくまるがいくぜ 若い「母公さん
宜が痛くハないかん てう「ナニ母公さんハ何ともないが

お前単外たち坐とお爺さんにお願ひあふして脊
負でもなるてお貰ひでなるか 若い「ナニ私ハ歩く方が面白
いヨ 苦「おとなしいく吏じやア譯ことに大変で麦菓細
工の香箱を買門て歩らざハなるゝ人。ドレ〳〵お爺さんと
母公さんと二個で手前を引て歩りませうト此うち
程なく大師河原にいたると門前の料理菓屋より
喚び立る 言ひども 「お這入りなさゐましお休ミなさいま」
此仕度でもなき門て入りましやハましト此変を後ろに

頃捨て三人は大師の本堂にはたり　「モシ私きやア
病気の肢なりたお稽にお百度をなげくことござるまほが
悪うござるませうかね人　苦へ十二悪いるがなるものか
能病後になんまり本後な思ひをあたら髭に當るかも
知れねんから勿体ないすぐが此身とお栄と三人でお百
度をなげようト是より三人は一心になりてお百度を
なげて居ると此とき撞撞堂の下に床几を並て旅笑
張の茶店に休んで居る四人連の若者何れも大

師来りと見へたるが　「ヲイ初公醴とはなんまり　勢
衰がねんぜ　「ヘン怒ういふお前も法子の横恰をしてゐる
ぶやアねんかゝソレ気を付ねんと犬が飛びつかア　「コヒ外
関のこりは喰物喧嘩はてんげんにまるがいて夫よりやア
考渡なの女を見な余やど美くしいぜ　「遠へねんとりやア
美婦ぶ　「ドレ〳〵なに所に居る　「ソレ直手所にお百度を
なげて居る女ヨ　「ムウとなりは上為ぶ　「ヲツトなんまり
うりまなさんな延が腮へソレ　「ヘンおめんじやなるめし

雅が涎をこらへ奴がなるもんだ ▲「空なら手を出して
見る口から繻伴の半襟までつこまして居らア
トキニ戯言は退けてなの女はなんでも見てゆうな顔
だぜ ●「なるかど然う言へば此身も見て捨ぶ ×「お茶
達は今気が付くのは此身ア考渡見るから詮ごと
いふなれ知りて居らア ●「ハテなそして詮ぶ ×「なりやア
茶が窪の濱屋の娼妓ヨ ▲「ムウ遠へね人清花と
言ひたのだ ●「然うだ〳〵道理で見てゆうな顔だと

おもひたこ ◻「夫に為ちやア何故なんな大きな児がなる
ぶらう ×「なるやア妓女にならねん茶のまだトヨ
●「夫じやア なの側に附て居る野郎が丈夫に遠へ
ねんぜ ▲「うまくまるないめんましい ◻「ヲヤお茶悟気か
なきれるぜ ▲「そこでも那女を女房にして乗しむよ
余かどいく月日の下で生きて野郎だと見へる ×「
色を見ちやア帰るは品川へでも引かくらばなる
めん ●「そのまゝ〳〵何でも押揚ると為ベエト海口り

ちらして此一群は頭で茶店を立出ける

第廿四回

大森宿を南へと大師詣の四の人連れ新嬢年増
うち交て最賑はしき一群の中にも目に立一個の弱
女「ヲヤこんなが大そう迷い呉ごねん些ゝ私に突
合て歩行てお呉てもよいじやあるいな人 安へ此ゝ丈
てもお茶は路無だらりしてお在ごものをト此時四の
間先へ梅八が条吉とならんで歩ゝ居たりしが渡るを

振向ひて「お若さんの遅足やア引イ「ヲヤお
茶だらり丈夫と一杯に歩くと思ひて大そう気が
強いの嬢さんアレ鳥渡お見なさい梅八さんが条さん
と見見よがしに手を引合はないだらりにして歩いて
行ヨ憎らしいなへ 安へヲヤお若さんもてんげんな苦労
性ごヨお茶も羨しかア 喜イさんの側へ引付いて
離れないでお在ならいくのに本ゝゝ「丈でも此ア
人茶もあつて扨サ「ヲヤ分ごとエ「ナアニ此方の此しサ

二度言ふと風邪を引ヨ　丈は糸相をもふしまさ
ねへ　ごがまお若さんト言ひかけて中音にて
清元　アノ川ぞこの祖師さんへ日に千べんのお願
のくとまへてむりにおねがひをかけしや神のねれさ
ごしおもふことなり此様に吏婦になりこもの利益と
お礼まゐりに又よくな
うゐ　まさらしてお呉ヨト言ひながら態と糸吉の側へ
ピッタリ寄りて歩行をお若は後から見てりまひながら

おすじく中音にて
清元　如も空もひつのまにかまして目出しまさなると
なり変わるにてもひきうねて跡や川崎ざう
あきをまだて蒲田にまらるゝ梅もまだて笑顔で
大夷の名さへうましきまんら摘多にふさりが
深まぐこのかげらふまぐこき竹火縄をひつけ煙
草にすぐうりと若井でそまと三津五郎　イヨ
大和屋にくとゆきうふ人のひぐこは

慕ひながら遊んで歩く梅八と粂吉の後をチヨイ
とつけるうめ「アヽ痛い　粂「此方ア痛いよりびつくり
したア　うめ「ホヽヽヽあんまり和合死意でなさつてお歩き
なさるからサ　うめ「和合歩きなさるが死意になさるが私の亭
主と私が歩行のごとくお嫌ひなさるまいな　粂「今で
誰もお茶さんの御亭主でないとはいひません
夫とも気になるなら町遊びなら女中に梅八亭
主と大きく紙へでも書て粂さんの背中へ張つて

お亭主　粂「イヤハヤ何方も達者な海口だ此方ア
気の毒なねへお茶達のお物怪にさゝれる様なものだ
安「ホヽヽヽ夫は何様も詮方が有ませんね女三人の
中へ男でないお前さんたつた一個でお在なさるのだ
粂「ハヽヽヽトキニ男でなをいぢしるが金太郎さんや
喜蔵さんは何様なさつたろう其も苦助さんに逢ひ
着て帰宅の懐を知らせたらうな　安「アイ
今頃は苦助さんに逢つて安年屋の二階で　私

達の往のを待てお在ぬやア遠ひないヨ「ホンニ苦
助さんもお蝶さんも嘸腕しからうよエ「私きやア苦
助さんハ言ハぎと知まるごがよお蝶さんが何様に
暇んでお在ごらうと思ふと速く顔が見えいヨ安「見に
然ても梅八ぎんとお若さんの大骨折で金の奪人が
知まるので帰来も悠くこと言ふのごから宿の吏なん
ぞも何様に二個の実意を暇んで居るり知まるい
ヨ「十二私きやア些とも骨も何も折らないけまども

梅八ぎんが味く言ひて十さんに海口せるので虫に
知まるのごヨ「どふして私達が縦合見出しこふ
為ても金さんがお屋敷の方をお掛合でなけまば
今日直に帰来が悠ふやうないヨ吏に為し
ても私きやア条さんの前でとんなるを言ひちやア
悪いけまどもお若さんハ何と思ひてお在ごり知らな
いが今さんに為る十さんに為る悪人でも一旦なりして世
話になりて見ると盗んご金さん元へ戻しこらいのち

だうりハ助けて半りこいねへ　ヨクヘアくそりやア私も然う
思ふヨ縦令貰ひこお金ハ苦助さんの盗まれこのまも
志ろ私達が主罪を見ならハして教さまるまゝなるを
為ちやア弟一二女の冥利がよくないねへ条さんや美
嬉さんハおと思ひてお呉ご条へそりやア二女のいふ所が
至極道理サ。ノウお安さん　安へ私も然う思ひまたヨ
条へ夫じやア此訳も金さんの働きて二女の頼ひが
悠ふ事に為て貰ひふト咄しながら歩き行くとき片

側の水茶屋より茲蔵が走り出て　茲へヲイく這処ごく
ヨクヘヲヤさんなが安年屋かと思ひこら這所にお在ご
そうごヨ　安へそんなら苦助さんもお蝶さんも一所に
久嬉しいねへ　茲へ丁度這処で行合ひこから此案庶人
家ひて帰来の悠ひこるをも咄しお茶達の来るさる
のをも待合せて居ゆこ　条へヤ夫ハ丁度奇妙ごつけ
ねへ私しやアまご掛遠ひて苦助さんもお蝶さん
にも此月にかくらねへから考慮お知己になること上でお頼び

東

をも中やせう

卜是より こなく茶店へたつり夫くの挨拶
より今日速かに帰系の悠ひし飲びを演ると
久てゐれども子もちけまじ実に畧に苦助お蝶お栄
等がよろこび如何なるべし看官宜く推しべし
姑且ゐれて金太郎が 金へヤ寔に目出度く 芝有
難ふござるまた是といふかこんなお茶さんがこの
お骨折ひとつで祈うなつて訳でござるまたから私が

基の身分になりまたと何様な仇敵報じをいたし
ても宜しうござるまた 安へホンニ是までは苦助さんも
お蝶さんも大そう苦労をなさつたが祈うなつて
見ると昔語でなりまた子丑 うゐへ私きやアお蝶
さんが北廓で病気でお在のとき苦助さんやお栄
さんに遺言ゐ出ゐなさつたるを吐しで閉いた
だろりでさん洞がとぶましたものを言時のお茶
さんの気はどんなだつたらうなへ そしへモウくゐの節は

迎もしまうりは為まいと思ひましたは　金「コレサ宮う
そんな事を言ひて延喜でもねへ事を言はずと梅公と
お若嬢は大師さまへ乗りたらば森龍とでも一所に
今の間に乗りて来るがいくどふせ今夜は平川の
角石へ泊る積りだから此身達は苦助さんと一所に
角石へ先へ往つて待りて居やう　「夫じやア梅八
さん鳥渡お乗りを為やうでは為いか森イさん一処に
来てお呉か　森「サア往ねへその替り呉が迷ひと乗て

来るぜ　「ヨイヨお若さんもし草叢て歩けなんだら
森イさんは脊負さるから　森「ヘン口のへらねへ事ヤ
言つて居らアトからかひながら三人は如先の方へと
急ぎゆく　金「トキニ苦助さん先刻も鳥渡もふしたと
とかり翌日はお屋しきからお前をお迎ひにお人が来る
苦ざからお前とお蝶さんとお栄児の衣類は今秋や
中に出来るやうに呉服屋へ誂へて乗やしたから何
にも他に此公配は入事ません　千鳥のるは今秋の

泊りで内相談をいたしやせう吏にあてもお蝶さんは
病後になんまり遠道をして労れては悪からう
から何卒駕を一挺雇ひ度ものごト言ふ所へ表
より旅駕に乗つもし一名の老人這所ぞくとこゝひ
ながら此茶店へ駕を入れさせ下さを待かね立出るは
思ひがけなき実右衛門ゆゑお蝶は目迷く吏と見て
てゝヘヲヤお爺ぎんでござるまたかへお懐かしうござる
ましたト泪ながらに取すがれば爺も侶に涙ごゑ

実へヲ道理ざまりながら今日帰来と聞て嬉しさ
此身も和女の勘當が迷く許して顔が見たさに
翌日まぜは待かねて駕で這所まで飛ばせて来た
老人の気の世話しないのを皆さん笑ふてゆさる
なト言ふ変聞てお栄はかけ出 思ひ「お祖父さんド
言ひたがり実右衛門の膝に取つけば 実へア孫かよき
おとなしく成人したノウ。アどふも幸が来ると嬉しいるぞも
ツイ涙が出てなりませぬアハ〳〵。イヤ目出度く

ト見より皆々実右衛門成るべきあ手数いる銭
方の物がたりをして不川宿に歌を明し次の日苦助
夫婦は首尾よく屋敷へ呼び迎へられ以前に
暫らね身のうゑとなりしかば見る金太郎
夫婦をたゞめ梅八お若などの蔭なれバとて金太
郎夫婦には厚く禮をなし お梅お若をば金子を
惜まず請出して条吉と喜蔵に娶合し又お栄が
世話になりし お山とお才にも多く重恨を歎し

残る方なく行屋きしかば手後かの人立湯と十三湯が
罪をもお梅お若が願ふに依りて苦助が種々と
執成命だけりはことはけられ遠き國人追ひ拂ひ
ましに二人は了に先非を悔ひこなる善心に立かへり
志ゆゑ月出度春とはなりにけり

春色鶯日記巻之十二 大尾

いろは文庫

[illegible]

ぴろは文

[illegible]八日市

小杉文右衛門

江戸大島登作義

仝　丁[illegible]

大坂　河内屋藤[illegible]

仝志書林

仝志書林

ウクヒス十二ノ十九